

【入選】

川が教えてくれたこと

宮城教育大学附属中学校
一年 野^の田^だ柚^{ゆず}羽^は

今年の夏、ロンドンを訪れて一番印象的だったのは、ビッグベンでもなくバッキンガム宮殿でもなく、テムズ川の色だった。灰色がかった茶色の水面は、観光ガイドで見た輝く川とはまるで別物だった。水面にはゴミが浮かび、泡立っているところもあった。

ロンドンでは、人口増加に伴い生活排水が増えているが、下水処理力が足りていない。その上、雨水と下水が合流式下水道に流れるため、二ミリの雨が降るだけで下水があふれる。そのため週に一回のペースで下水をそのままテムズ川に流している。テムズ川の一部では、大腸菌が許容基準値のおよそ十倍検出された。テムズ川での伝統あるボートレースでも、「水しぶきに気をつけろ」と入水禁止措置が下されたほどだ。さらに、油をそのまま排水溝へ流す習慣、飲食店や工場からの排水のため、ビクトリア朝時代から使用している下水管は、ファット・バーグと呼ばれる巨大な油の塊が付着し、問題となっている。最近では、浄水場における高度な浄化処理技術の開発など、浄化事業が進められているが、川の透明度は低く、魚の姿を探すのは難しい。歴史ある大都市の象徴であるはずの川が、人間の活動によってこれほどまでに傷ついてしまったのかと、胸が痛んだ。

一方、日本に戻ると、近所の川の澄んだ流れが、新鮮に感じた。小学校のときに行った下水処理場のことを思い出した。日本の下水処理場では、沈殿を繰り返し微生物を使って反応させ、高度処理等も行つて水をきれいにしている。ロンドンと同じ合流式下水道のところもあるが、雨量が増えた場合は貯留池に一時的に貯留し、雨が止んだ後に処理している。貯留池の容量を超える場合でも、簡易処理をしているため、処理せず川に流れる

ことはない。もちろん日本の全ての川がきれいというわけではないが、テムズ川と比べて日本の川の多くは透明度が高く、生態系が健全に保たれているように思う。

この違いは、単なる国の違いだけではなく「水をどう捉えるか」という文化の違いにも関係しているだろう。日本では昔から、水は神聖なものともみなされ、田畑を潤す恵として感謝されてきた。俳句や和歌に登場する清流の描写をみると、その価値観は生活に根付いてたとわかる。一方、産業革命以降のイギリスでは、水は工業の原動力であり、川は大量の廃棄物を流す場所として使われてしまった。水を「利用する対象」として見た結果、汚染が進んでしまったといえる。

しかし、日本でも高度経済成長期には工場排水による水質汚染が社会問題となった。その反省から、厳しい排水規制と下水道の整備が進み、今のきれいな川が保たれている。つまり、日本の川は多くの犠牲とその後の努力の上に成り立っている。

水は私たちが生きるために最も基本的な資源だ。人間の体の約六割は水でできており、一日でも水がなければ命は危ない。農業や工業にも水は欠かせない。地球上の水のうち、人間が飲める淡水はわずか二・五%しかない。その貴重な水を汚せば、浄化に膨大な時間と費用がかかる。テムズ川の現状は、未来への警告を私たちに突き付けているように思う。

だからこそ、日常生活から水を大切にする行動を起こしていきたい。排水にゴミを流さない、料理の油はふき取って流さない。小さな行動の積み重ねが大きな変化となる。きれいな川を守ることは、生活を守ることに未来を守ることへとつながっていく。

ロンドンでの衝撃と日本での新たな気づきは、私が水について考えるチャンスくれた。私は、このかけがえのない水に感謝しながら、きれいな川を未来へ残していきたいと思う。